

慣用句における移動と解釈の問題*

藤巻一真

神田外語大学・東京国際大学

本稿では、慣用句における移動（特にかき混ぜ規則）と解釈に焦点をあて、意味的考察(宮地(1982), 国広(1985), 中村(1985))をもとに、新たな観察を提示しながら、何故、慣用句には移動の可能なものと不可能なものがあるのかについて考察する。かき混ぜ規則は、意味変化を生じさせないものであると仮定されているが(Saito (1989))、では、何故、かき混ぜによりその一部を移動すると悪くなる慣用句とそうでない慣用句があるのかが基本的な問いとなる。この問いに対して、かき混ぜによって移動された要素（主に名詞句）の意味解釈と、移動元に残されたコピーの名詞句の意味解釈の差が解釈上の問題を生じさせているのではないかという答えを、一つの可能性として、提示する。

1. はじめに

慣用句には、(1)(2)にあるようにかき混ぜ等の操作によりその一部を移動できるものとそうでないものがある。「手を延ばす」は、その一部の「手を」を移動することが可能である。一方で、「手を入れる」は、「手を」を移動することは不可能である。

(1) a. 太郎がホテル業に手を延ばした。 (固定性が低い)

b. 太郎が手をホテル業に延ばした。(Miyagawa 1997)

(2) a. 太郎が花子の論文に手を入れた。 (固定性が高い)

*本稿は、内容の一部を井上和子先生主催の CLS 定例研究会(2005 年)にて発表させて頂いた。参加者の井上先生を始め、伊藤健人氏、大倉直子氏、上田由紀子氏、綿貫啓子氏から貴重なコメント・批判等を頂いた。この場を借りて感謝の意を表す。

b. * 太郎が手を花子の論文に入れた。(Miyagawa and Tsujioka 2004 改変)

このように、かき混ぜによる移動の可否（固定性）により、慣用句は(3)のように分類可能である。¹（以下、 と□は、それぞれ、固定性の低と高を表す。）

(3) a. 固定性が低い: 手を延ばす、けちを付ける、腹を立てる

b. 固定性が高い: 手を入れる、拍車をかける、油を売る

本稿では、かき混ぜが意味変化を伴わない移動であるならば (Saito 1989 等)、何故(2b)が悪いのかということに対して、慣用句における移動と解釈に焦点をあて、一つの方向性を示す。以下2節では、慣用句における一部を移動した場合の解釈について見る。続いて3節において、固定性が高く、かき混ぜ規則をかけると慣用句の解釈のなくなるものでも、格変化が起こるものがあることから、固定性が高い慣用句にも、通常の動詞句の持つ内部構造を持つと仮定するのが妥当であることを議論する。4節において移動は元位置にコピーを残すとした場合(Chomsky 2004)、(2b)の悪さはどこから来るのかに対して、一つの答えを提示する。

2. 慣用句における移動と解釈

本節では、一般の文のかき混ぜにおいては観察されないが、慣用句のかき混ぜにおいて観察される移動と解釈の問題について考察する。

かき混ぜは、一般に意味の変化を伴わないとされている。(Saito (1989)) 次の例では、どちらの名詞句「本を」も LF において同じ解釈を与えられるものであると考えられている。²

(4) a. そのとき太郎が本を読んでいた。

¹ 他のテストは宮地 1982 や村木 1985 を参照。さらに慣用句の意味的・統語的特性については、それぞれの分類が他の特性と関連しているようではあるが、完全に対応する訳ではなく、複雑な要素が絡み合っているため、ある分類に対して例外も当然ある。以下、筆者の中でははっきりとしているものを提出しているが、筆者と判断と合わない場合は、個々人の中で、本稿で意図されているものを使用して論を追って頂ければ幸いである。

b. そのとき本を太郎が読んでいた。

これは、当たり前前のようなのであるが、実は慣用句におけるかき混ぜを観察すると必ずしも当たり前前とは言えないようである。(1)(2)を(5)(6)として再掲。)

(5) a. 太郎がホテル業に手を延ばした。

b. 太郎が手をホテル業に延ばした。

(6) a. 太郎が花子の論文に手を入れた。

b. * 太郎が手を花子の論文に入れた。

まず、かき混ぜが可能である(5)に立ち返ってみると、(5)においては慣用句の一部の「手を」が、移動しようとしまいと、「手を」は手の意味であるように理解できる。つまり、(5a,b)のLFにおける「手を」は、同じ解釈を受けているものと想定できるということである。この場合の「手を」の意味を仮に S_1 と表すことにする。これは、(4)の一般の文のかき混ぜの時の「本を」と同様であり、(5a,b)の両者において「手を」の意味が S_1 であるということである。

ところで、(6)は、事情が異なるようである。まず、(6a)において、この「手を」は、物理的な手を意味していると捉えることは難しいように思える。動詞句の「手を入れる」全体で、比喩的に「不足・不備の点を補う」(広辞苑)の意味になっていと考えられるので、「手を」自身に指示物がないと考えるのが妥当かと思われる。議論の為、この場合でも仮に意味を S_0 としておく。³そして、興味深いのは、かき混ぜによる移動が不可能な(6b)における意味解釈である。容認度の低いことを承知で、(6b)を見てみると、物理的にはあり得ないが、「太郎が実際に物理的な手を花子の論文に入れた」という解釈が可能のように思える。言い換える

² ここで同じ解釈を与えるものというのは、同じ指示物(例えば太郎のLGBを)という意味ではなく、「本」が辞書ではなく「本」を表しているということである。

³ 中村(1985)の論を借りると、この慣用句の成立過程においては「手」が何らかの形で関連があったかもしれないが、現在の話者においては、(2)において手の解釈はないということになる。

と、(6b)の LF における「手を」が物理的な「手」つまり S_1 と解釈されているということである。この LF における「手を」の解釈により、文全体の解釈が「物理的な手を原稿に入れる」となる。しかし、この文の表す行為は実際には起こりえないので、奇異な解釈を与える文として、(6b)は意味的におかしな文になっている、そう我々は判断しているのではないかということである。⁴

また、慣用句の中で慣用句の意味以外に、物理的にその行為がかき混ぜをしたときにも可能な場合がある。

- (7) a. 太郎が喫茶店で油を売っていた。(ok 慣用句、ok 物理的)
b. 太郎が油を喫茶店で売っていた。(* 慣用句、ok 物理的)⁵
- (8) a. この件に関して太郎は花子に下駄を預けた。(ok 慣用句、?物理的)
b. この件に関して太郎は下駄を花子に預けた>(*?慣用句、ok 物理的)

(7a)における「油を」は、先ず、物理的な意味での油が可能である。この場合の「油を」の意味を仮に S_1 とする。慣用句における「油を」は、実際は「油を売る」行為からの比喩的な意味が与えられているので、「油を」自身に実際の指示物があるわけではない。この場合の「油を」の意味を、意味がないのであるが仮に S_0 とする。(8a)も同様で、物理的な解釈は、優先順からいうと低い「ほんとうの」を「下駄」の前に入れると、逆に物理的な意味にしかならないので、可能で、「下駄を」は物理的な下駄(S_1)ということである。慣用句においては、謂われはともかく、「下駄を預ける」という動詞句全体で「相手に頼んで処理を一任する」の意味になるので、この場合の「下駄を」に一般の下駄の解釈を与えるわけにはいかない。油の場合と同様に指示物がないと考えておくことに

⁴ 実際は、容認度の低さがどこから来るのかという問題を含んでいる。ここでは意味解釈の問題かということである。4節を参照。

⁵ 原義で使われることがほとんどなくなった例として国広が挙げている「道草を食う」は、以下のように比喩的意味を誘う「学校の帰り道」をつけても、実際に草を食べた解釈が強いと思われる。ただ、非常に弱い比喩的な意味が残っているような感じもする。

i. 学校の帰り道、道草を太郎が食っていた。

するが、仮に意味としては S_0 とする。⁶ 一方、かき混ぜによる(7b)(8b)における、「油を」「下駄を」は、物理的な油(S_1)と下駄(S_1)の解釈を与えられるものになっていると考えられる。

この点を支持するがごとく、次のような例がある。中村(1985)によると次の慣用句は、「一般の人がこの句を使うときに、個々の構成要素のイメージがはっきり定まらぬまま、なんとなく全体の意味を描いている」ものである。国広哲也(1985)の慣用句の意味の分類における構成語の意味が不透明な場合であろう。

- (9) a. 羽目をはずす、しのぎをけずる、地団駄を踏む、くだをまく
- b. ?そのとき羽目を子供らがはずして、大騒ぎだった。
- c. ?その話を聞いて地団駄を子供らが踏んだ。

若干不自然さが残る気もするが、(6b)のような悪さは感じられないように筆者には感じる。これらは構成要素の一部がはっきり話者に認識されていないのであるから、動詞句全体が慣用句の意味を持っている点で、(6)の「手を入れる」と同じ訳である。その一方で、構成要素に目を向けると、専門家以外の一般の話者にとってはその意味は分からないが、名詞句として何らかの意味を持った「羽目を」や「地団駄を」がある。その何らかの意味を今仮に S_x とすれば、(9a)の場合の「羽目を」と(9b)の「羽目を」は、同じ S_x と解釈される「羽目を」と考えられる。大切なのは、かき混ぜがかかっている「羽目を」とかかった「羽目を」は同じものと感じられる点である。

ここまでをまとめて、図式的に示すと次のようになっている。

- (10) a. ...ホテル業に手を(S_1)延ばした
- b. ...手を(S_1)ホテル業に延ばした

⁶ 仮に「下駄を」が何らかの「決定権を」のような意味を持っていると想定される場合は問題となりそうであるが、その場合でも意味を S_y として捉えることは可能であろう。

- (11) a. ...[花子の論文に[手を(S_0, S_1)入れ]]た⁷
 b. ...[[手を($*S_0, S_1$)] [花子の論文に[入れ]]た
- (12) a. ...[喫茶店で[油を(S_0, S_2) 売っ]てい]]た
 b. ...[[油を($*S_0, S_2$)] [喫茶店で[売っ]てい]]た
- (13) a. そのとき子供らが[羽目を(S_x)はずし]て、
 b. ?そのとき[羽目を(S_x)子供らが[はずし]]て、

ここから言えることは、かき混ぜにより移動した名詞句の解釈は、 S_0 以外の意味で解釈され、特に物理的にもものが存在する場合は、その解釈のみが許されているのではないかということである。⁸

3. 慣用句の内部構造

本節では、移動のできない固定性の高い慣用句においても、他の統語的操作の対象となることから通常の句と同様の内部構造を持つと仮定することが妥当であることを議論する。⁹

前節で、かき混ぜができない慣用句は、動詞句全体で意味をなしているので、その内部の名詞句には指示物がない（意味を S_0 ）とした。つまり、「油を売る」が慣用句としての解釈を持つときには、その内部の名詞句の「油を」には指示物がない（意味を S_0 ）ということである。このことから、かき混ぜの不可能な慣用句には動詞句の内部に構造がないのではないかという疑問が生じる。これはあくまでも一つの可能性としてはあるが、初めから慣用句の意味を与えられた内部構造のない動詞句として派生に加わる可能性である。これを「手を延ばす」と「手を入れる」

⁷ この a の例は、「手を」自身は物理的な解釈が可能な位置として捉え、 S_1 を可能としている。実際は物理的解釈をした場合には、それが起こりうる可能性が低いので、意味的におかしな文になる。

⁸ この現象を考えるにあたり、一見 Chomsky (2001)における Object Shift(OS)の分析が適用可能かと思えるが、細部にわたり異なる点（例えば、ここでのかき混ぜが、 v^*P の edge へとは限らないことや、OS においてみられる O の特徴とここで扱っている指示性の問題との相違等）が見られる上、かき混ぜと OS の比較という大きな問題を扱うことになるので、この可能性の検討は今後の課題とする。

⁹ 英語の慣用句の議論でも一般に内部構造は仮定されている。

で示すと次のようになる。¹⁰

- (14) a. 「手を延ばす」
 VP
 / \
 NP V
 △ |
 手を 延ばす
- b. 「手を入れる」
 VP
 / \
 手を入れる

「手を延ばす」はVP内の構造として[_{VP} NP V]という構造を持つのに対し、「手を入れる」の内部構造は[_{VP}]というようになっていて、このVP全体に慣用句の解釈を与えるとする可能性である。この可能性は本稿ではとらないが、仮にそうだとすると、移動の可否に関しては、VP内にNPがある「手を延ばす」は、「手を」を移動可能で、もともとVP内にNPがない「手を入れる」は、移動の対象として「手を」選ぶことができないとするのである。

ところが、仮に「手を入れる」にVPのみ存在し、その内部構造がない（又は不可視・不透明である）とすると、まったく統語的操作がかからないということになってしまうのであるが、かき混ぜによる移動は不可能であっても、受身による名詞句の格変化が可能な場合がある。先ほどの「手を入れる」がその例である。

(15) 移動のない受身文（格変化のみ）

- a. （昨日）指導教官によって花子の論文に手が入れられた。（FI）
b.* （昨日）指導教官によって手が花子の論文に入れられた。
c.* （昨日）手が指導教官によって花子の論文に入れられた。

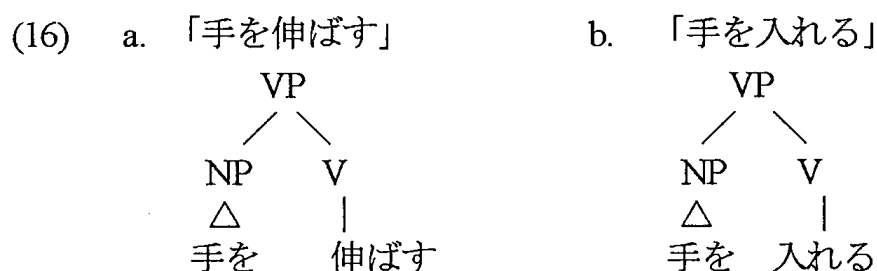
(Fujimaki 2005)

(15a)は、「手を入れる」から受け身形の「手が入れる」が可能であることを示している。さらに、(15a)と(15b,c)の対比が示すように移動を加えると不可能になるということを示している。言い換えると移動なしの受身文は可能であるということである。

¹⁰ 本稿では、名詞句をNPと表しているが、DPと読み替えて頂いて構わない。

仮に(15b,c)は、かき混ぜと同じように、VP 内に内部構造がないので移動ができないとしたとする。そうすると(15a)の「手を」から「手が」への格変化をどう説明するかという問題が生じる。なぜなら、「手を入れる」には内部構造がないので、慣用句の受身文の格変化を、統語部門で捉えることが通常受身文の格変化のようにはできなくなるからである。ならば、これはレキシコンや他の部門で捉える問題であるかというのと、これには問題がある。生成文法の枠組みでは、特に GB 理論(Chomsky 1981)以来現在に至るまで、受身文の格変化は、その分析の詳細は異なるにせよ、統語部門で捉えられるべき問題とされてきたからである。固定性の高い慣用句(つまり内部構造を持たないと今想定しているもの)の場合のみ、受身文の格変化を別の部門で捉えるというのは、不可能でないにしても理論の整合性からみて問題が残る。¹¹

そこで、本稿では、やはり一般にそうされているように、「手を入れる」にも「手を伸ばす」と同様に[_{VP} NP V]という内部構造があり、そのNP に対して統語的な操作がかかると仮定する。



こうすると慣用句における移動なしの受身の操作がかかる場合の名詞句の格変化も、一般受身文と同じものとして捉えることができることになる。

4. 考察

前節において、かき混ぜによる移動はできないが、受身の格変化がある

¹¹ 同様のことが、ガーノ交替においても言えるが、説明は省略する。

- i. 指導教官によって花子の論文に「手が入れ」られた理由が知りたい。
- ii. 指導教官によって花子の論文に「手の入れ」られた理由が知りたい。(Fujimaki 2005)

例「手を入れる」を挙げ、動詞句全体で比喩的な慣用句の意味があり、内部の名詞句には指示物がない場合でも、内部構造を認めることで、より一般的な説明が可能になることを議論した。しかし、まだ、移動の可否についてどう説明するのかという問題が残っている。本節ではこれに関して、極小主義の枠組みにおける結合(Merge)(Chomsky (2004)等)との関連で議論する。¹²

移動において痕跡ではなくコピーを残すと仮定すると、(5)(6)(15)は次のようになる。(括弧()はコピーを表す。)

(17) a. 太郎がホテル業に[_{VP}手を延ばし]た。(=(5))

b. 太郎が手をホテル業に[_{VP}(手) 延ばし]た。

(18) a. 太郎が花子の論文に[_{VP}手を入れ]た。(=(6))

b. * 太郎が手を花子の論文に[_{VP}(手) 入れ]た。

(19) a. 指導教官によって[花子の論文に[_{VP}手が入れ]]られた。(=(10))

b. * 指導教官によって手が花子の論文に[_{VP}(手) 入れ]られた。

ここで大切なのは、コピーが元位置に残るのであれば、(18b)の動詞句に慣用句の解釈を与えることは、(17b)に慣用句の解釈が与えられるかぎりにおいて可能なはずである。言い換えると、コピーと動詞により(17b)において慣用句の解釈が可能であるなら、当然(18b)においても慣用句の解釈が可能になるはずである。¹³そうであるとすると、(18b,19b)における問題は、慣用句の解釈ではなく、かき混ぜにあることになる。¹⁴

(17)は通常の動詞句と同様に、「手を」は物理的な解釈を持つ名詞句であるから、かき混ぜによって移動が可能である。(18)の「手を入れる」

¹²移動(Move)も結合(Merge)の一つで、内部からの要素の結合(Internal Merge)として捉えられ、移動元に「コピー」を残すとされる。実際はコピーといっても、もともと結合(Merge)されたものが元位置に残るということである。

¹³通常の意味の場合も同様にコピーを利用するのは言うまでもない。

¹⁴この他、かき混ぜ規則を適用するとき、何らかの制限をかける方法も可能性としてはある。たとえば、指示物のない名詞句は、かき混ぜ規則はかからないとする等である。但し、これは固定性の高い慣用句にはかき混ぜがかからないと言うのとそれ程変わらなくなる。

にも内部構造を与え、「手を」を名詞句として格変化の説明を統語上行うとした以上は、かき混ぜによって移動がなされても本来なら問題がないはずである。つまり、どちらも名詞句であるかぎりにおいて、かき混ぜが適用されることには問題がないはずである。

唯一の差としては、かき混ぜの対象となる名詞句に指示物があるかないかである。しかしながら、英語の *there* 構文における *there* の移動を考慮に入れると、ここに根拠を求めづらくなる。¹⁵なぜなら、次の例の *there* には虚辞故に意味素性があるとは考えられていないにも関わらず移動すると分析されるからである。虚辞の *there* の意味がそれ自身にはないのであれば、状況は「手を入れる」の「手を」と同じはずである。

(20) a. *There seems to be a man in the room.*

b. *There seems [(there) to be a man in the room]*

では、どこに(18b)=(2b,6b)の悪さを求めたら良いであろうか。ここで思い出されるのが、2節での観察である。慣用句の一部にかき混ぜ規則を適用した時の移動された要素の解釈である。

(21) a. 太郎が手を花子の論文に入れた。(=(6b)) (* 慣用句、*?物理的)

b. 太郎が油を喫茶店で売っていた。(=(7b)) (* 慣用句、ok 物理的)

この場合の「手を」と「油を」は、実際の手と油を意味しているように解釈されるというのが、重要な点であった。そして、(21a)においては、物理的な手を論文に入れる解釈は、実際の状況としては起こりにくい。そこで、我々は意味解釈と現実が合わないので、この文の意味がおかしいと判断しているのではないかということであった。これは言い換えると、統語的な操作としては、かき混ぜ等自身に問題(制限)はないが、結果として派生された文の解釈において、移動された場合にその移動先で、ある解釈が強制されているのではないかということである。図示すると次のようになる。

¹⁵ この移動は、EPPによるものとされている。(Chomsky 2001 等参照)

$$(22) \quad \dots \text{NP}_i \dots [\text{VP} \quad (\text{NP}_i) \quad \text{V}]^{16}$$

$$\quad \quad \quad \downarrow \quad \quad \quad \downarrow$$

$$\quad \quad \quad \text{S}_x, *S_0 \quad \quad \quad \text{S}_x, S_0 \quad \quad \quad (x=1, 2, \dots)$$

このことは、次のように捉えることができそうである。通常の名詞句（固定性の低い慣用句と慣用句の物理的解釈の場合を含め）ではかき混ぜにより移動された場合もそうでない場合も、それぞれのコピーの意味解釈に差は生じないので問題はない。しかし、固定性の高い慣用句の場合は、移動先と移動元でそれぞれの解釈が異なるので、問題が生じているのではないかということである。

5. まとめ

慣用句における移動の可否について、意味的考察から示唆を受け、移動と解釈の問題として、それを捉える試みを行った。慣用句の内部の名詞句を移動した場合、特に物理的な解釈を持つ場合（そして慣用句にはそういう名詞句が関係していることが多いのだが）、その物理的な解釈(S_x)が強制されやすいという観察に基づき、移動元と移動先での解釈が異なることが問題となっているのではないかということ、一つの可能性として提案した。残る問題は、何故、移動先で物理的な解釈が強制されるのかということである。ここで扱ったかき混ぜは、相(phase)の端への移動ではないと考えられるので、Topic/Focus 等との関連は考えにくいわけである。この解釈が意味側のインターフェイスにおけるものなのか、その外側での問題なのかについては今後の課題とする。

参考文献

Chomsky, Noam (1981) *Lectures on Government and Binding*, Foris.

Chomsky, Noam (2001) Derivation by phrase in M. Kenstowicz (ed.) *Ken Hale: A*

¹⁶ この場合の記号 i は、単に便宜上名詞句の移動を示すためのものであり、同一指示という意味ではない。

Life in Language, 1-52, MIT Press.

Chomsky, Noam (2004) Beyond explanatory adequacy, in A. Belletti (ed.) *Structures and Beyond*, 104-131, Oxford University Press.

Fujimaki, Kazuma (2005) On the position of nominative NPs in Japanese: the possibility of nominative NPs in-situ. *Scientific Approaches to Language* 4: 1-32, Center for Language Science, Kanda University of International Studies.

国広哲弥 (1985) 「慣用句論」『日本語学』1, Vol. 4, 4-14

村木新次郎 (1985) 「慣用句・機能動詞・自由な語結合」『日本語学』1, Vol. 4, 15-27

宮地裕 (1982) 『慣用句の意味と用法』明治書院

中村明 (1985) 「慣用句と比喩表現」『日本語学』1, Vol. 4, 28-36

Saito, Mamoru (1989) Scrambling as a semantically vacuous A'-movement, in M. Baltin, and A. Kroch (eds.) *Alternative Conceptions of Phrase Structure*, 182-200, University of Chicago Press.

広辞苑 (第五版) 岩波書店

261-0014

千葉県美浜区若葉 1-4-1

神田外語大学

言語科学研究センター

350-1197

埼玉県川越市的場北 1-13-1

東京国際大学

言語コミュニケーション学部

fujimaki@tiu.ac.jp